女性アスリートによる「性の商品化」をめぐる

——スポーツ規範と「構成的外部」⁽¹⁾——

Female Athletes and the Commodification of Sex:

Sporting Norms and the “Constructive Outside”

山口理恵子

YAMAGUCHI Rieko

This paper explores the structure of sport culture using the concept of the “constructive outside” as proposed by Judith Butler. Issues of “sexual commodification” by female athletes, such as nude representations, have been on the rise since around 2000. Although most scholars explain this as resulting from a lack of funds for women’s sport, explanation is based on the notion that a “woman” is a consistent entity. In addition, such perspective may ignore the power of sporting norms that implicitly universalize “masculinity” in sport. In this paper, I am concerned with the relation between the issues of the “sexual commodification” of female athletes and the function of the “constructive outside” that always surrounds sporting norms.

1. はじめに

女性のスポーツへの参画が拡大し、競技能力の向上も飛躍的に高まっている今日において、女性アスリート自身の「性の商品化」現象が浮上してきた。「競技継続のための資金づくり」というのが、大々的に報じられている彼女たちがヌードになった理由であるが、そのほとんどは資本主義経済の「先進国」出身者であった。しかも、対象者のほとんどが白人（Caucasian）のアスリートであった。資金を調達する方法としてヌードになるというのは、同じく資金不足の問題を抱えながらアテネ五輪に出場した、日本女子ホッケーチームの状況とは対照的であった。

女性のヌードは、しばしば絵画制作のモデルとして登場し、「芸術」として鑑賞されるものと認識される一方で、主にヘテロセクシュアルな文脈の「ポルノグラフィ」として官能的な欲望を刺激するものにもなりうる。これら二つのイメージに対する線引きは「どこで、どのように、観られるかということ、誰がそれにアクセスし、その存在に対してどのように振る舞い、反応するか」[Nead 1992=1997: 195]⁽²⁾により流動的なものになると考えられる。だが、「芸術」であれ「ポルノグラフィ」であれ、ヘテロセクシュアルな社会状況下の女性のヌード表象は、男性のヌード表象よりも市場価値を産み出す「商品」とされ、したがって量産され流通する。また、リンダ・ニードは女性の身体が高級芸術の形式と枠の中で意義深いモチーフとして比喩化されることで、一般芸術に価値と意義が与えられ、そのことによって「女性のヌードは、女性性と女性のセクシュアリティを包摂し、抑制する手段として理解される」と言及している[Nead 1992=1997: 9]。

本稿では、これまで「男性領域」とされてきたスポーツ界に、女性が参画し活躍する光景が珍しくなくなった今日において、経済的に決して「後進国」ではない国々の選手でありながら、「女性性」を喚起させるヌードという、いわば「古典的な」方法により資金調達に至った女性アスリートの「自己選択」について、スポーツ文化構造の背景に焦点をあ

てながら考察していく。よって本稿は、彼女たちの「性の商品化」の是非を問うことなく、むしろジェンダー格差の視点から、その構造を説明することを目論むものである。なお、「性の商品化」に関しては、広義の概念を採用し、「性にまつわる行為、情報が商品という形で金銭を媒介として流通する」[瀬地山 1992:108]ものと定義しておきたい。こうした枠組みに基づいて、以下では女性アスリートの性的表象を「性の商品化」の一つのあらわれとして取り上げていくこととする。

2. 女性アスリート自身による「性の商品化」現象

2000年に開催されたシドニー・オリンピックは、女性がオリンピックに参加してちょうど1世紀を迎える大会であった。女性たちの競技能力の向上はもちろんのこと、参加人数、参加種目の拡大は1世紀の節目を象徴する大会でもあった。しかし、この大会と時を前後して女性アスリート自身による「性の商品化」現象が急増した。

シドニー五輪開催前に、開催国であったオーストラリア代表の女子サッカーチームが資金づくりの名目で（結果的には話題づくりにもなったが）ヌードカレンダーを発売し、完売した。それに引き続きソフトボールと陸上短距離のオーストラリア代表選手が全裸写真集を発売し、完売したとされている。2003年バルセロナで開催された世界水泳開催前に、地元のシンクロナイズドスイミングチームが全員でヌードになり、同じ年、オランダでも陸上競技選手が有料ウェブサイトでヌードになった。オランダの例は陸上競技連盟への助成金が減り、彼女たちが練習を継続するための費用を捻出できなくなったことが原因であると言われている。2004年に入ってから、米国代表の陸上選手が男性雑誌の *Playboy* の中でヌードになり、スペインハンドボールチームの女性プレイヤーもスポンサーを獲得するためにみずからヌードになった⁽³⁾。

女性アスリートの「性の商品化」現象を議論する際に、プロテニスプレイヤーのアンナ・クルニコワ選手が存在がしばしば取り上げられる。クルニコワ選手は1995年のプロデビュー以来、「ロシアの妖精」として一躍人気を博し、メディアや各種さまざまな企業によって彼女の容姿やスタイルが注目されるようになっていった。そして、モデル業やスポンサー料で稼ぎ出す年俵が、本業のテニスで獲得する賞金をはるかに上回ったということで話題を呼んだ。また最近では、*Sports Illustrated* 誌（2004年度版）でファッションモデルに混ざって観賞用の水着特集のモデルとして登場した。

これまで男性誌には、スポーツを背景とするアスリートではない女性の客体化が多く利用されてきた。たとえば *Playboy* は、女性のファッションモデルを起用し、彼女たちに“アスレティックな”ポーズをとらせることで、「女性アスリート」の印象を力強くパワフルなものから、“チャーミングでセクシーなもの”へと変更させようとしてきた[Nelson 1994:23-24]。ところがクルニコワ選手の登場以来、男性誌の中で性的に表象される「アスリート」と「モデル」を分かť境界が曖昧になりつつある。これまでもアスリートでありながら、ファッションモデルとしても活躍する選手は存在していた。しかし、クルニコワ選手のようにスポーツ以外の場所においても言動が常にグローバルに、しかもヘテロセクシュアルな文脈で、性的に注目されるアスリートはこれまで存在しなかったと言える⁽⁴⁾。またクルニコワ選手は、アスリートとして「勝利」することや高い競技パフォーマンスの追求よりも、ビジネスで「売れる」ことを重視しているアスリートとしても映る。このような彼女のあり方は、競技能力だけでなく、セクシュアルな容姿やスタイルも女性

アスリートの人気には欠くことのできない要素であるという認識を人々に広めたとして、フェミニストからも「クルニコワ・シンドローム」⁽⁵⁾と呼ばれている。

2000 年前後に急増した女性アスリートによるヌード化現象は、彼女たちが「売れる」ことを想定してセクシュアルな「まなざし」を積極的に利用した結果であったと言える。このようなことから、ヌード表象に至った行為は資金不足という現実と直面し、「女の性的表象（ヌード）は売れる」ことを内面化した女性アスリートが、競技継続のためにアスリート生命を賭けた「主体的」取り組みと言えるのかもしれない。しかし、彼女たちに「自己選択」や「自己決定」をせまるものは何なのか。なぜ、女性アスリートは「売れる」ために性的表象に至るのだろうか。

3. 「まなざし」に関するこれまでの先行研究

上記の疑問を考察するために、ここでは女性アスリートに向けられる「まなざし」について先行研究をまとめるとともに、問題点も指摘してみたい。女性アスリート（もしくは女性スポーツ）の「まなざし」に関する先行研究は、大きく二つのパターンに分けることができる。第一のパターンとしては、女性アスリートを周縁・客体化するものとして「まなざし」を捉える研究である。そこではマス・メディアが伝える表象や言説の質／量的データを用い、主に男女の比較にもとづく格差に焦点をあてている。そしてこのパターンにおける研究では、メディアを介して情報を送る側が「女性性」のイメージやステレオタイプを内在化し、再生産していることを問題化している⁽⁶⁾。たとえばそれは、女性アスリートがメディアの中で表象される際に、性的かつジェンダー化された「まなざし」が向けられることにより、彼女たちの競技能力が軽視・無視されていることを取り上げるというものである。

一方、第二のパターンは、自己規制として働く「まなざし」に関する研究であり、「主体」の内部から機能する力が「主体」を形成していくとする、ミシェル・フーコーの「従順な身体」⁽⁷⁾の理論を応用したものである。すなわち、社会的規範としてある「身体像」から逸脱しないよう「自己」に対して「まなざし（監視）」を向け、自己規律を習慣化していくというものである。これらの研究では主にエアロビクスに携わる女性を対象としてきた。北米においてはウーマン・リブとともに高まったエアロビクスのブームが、女性たちをエンパワーし、それへの積極的な参加が彼女たちを取り巻くジェンダー・イデオロギーへの「抵抗」と受け止められてきた一方で、エアロビクス自体がダイエットや「健康」を目的とするエクササイズであるために、社会的に「ノーマルな」身体形成——規範的身体像への従属——にも帰結しているとされてきた⁽⁸⁾。

先行研究の前者のパターンは、女性アスリートや女性スポーツを客体化するメディアの表象を指摘し、メディアの中に潜む〔ヘテロ〕セクシズム⁽⁹⁾の再強化に対する異議申し立てを大きな柱としてきた。またそこでは、家父長制にもとづく男性中心の「まなざし」が女性アスリートに対して一方的に向けられるという男性優位の抑圧的権力という構造も浮かび上がらせた。その一方で、これらの先行研究は、メディアの視点を家父長制社会における「男性的な」ものととらえ、その「まなざし」を向けられる「女」を、所与のカテゴリとして扱い、隷属的な地位に位置づけしまった。そして所与の「女」は「わたしたち」であるという同一化を、フェミニズムみずからおこないつつ、「男性的な」まなざしから解放された「女」の表象をめざそうとする。このことは、「フェミニズムが構築する主

体の表象範囲を、フェミニズムがさらに拡張されると考えることは、表象の主張自体に構造的な権力が宿ることを考慮に入れていないために、逆にフェミニズムの目標を失敗にさらすという、皮肉な結果を生むことになる」[Butler 1990=1999:24]とするジュディス・バトラーの指摘と重なる。

したがって、この立場に依拠するフェミニストは、女性アスリートが自ら足を踏み入れる「性の商品化」の背景について説明することができない。それどころか、クルニコワのような選手を、「わたしたち」の外部に位置づけ、家父長制社会の抑圧を受け入れる「男」の共犯者として退けてしまっている。したがって、「スポーツ文化」が保持・再生産している「規範」の虚構性を照らし出すためには、むしろ、「男」が「女」を物象化し抑圧しているという一面的な見方ではなく、メディアが女性アスリートの性的表象をこれほどまでに反復することの意味や、そのような表象が「ジェンダー・トラブル」の契機となる可能性をさぐるという視点を採用すべきではないのだろうか。

では、「従順な身体」に関する先行研究に関してはどうかであろうか。フーコーの「主体化＝隷属化」の視点は、女性アスリートの「性の商品化」に対する「自己決定」の「自己」や「主体」の意味を問い直す契機を与えてくれた。だがその一方で、「抵抗－服従」の自己規律化の「証明」に重点が置かれるあまり、問題が個人に帰結しがちで、「服従」を強いる「力」の実相やその意味については、十分な分析がなされているとは言えない。

また、「健康の維持・増進」や「アンチ・エイジング」を目的としておこなわれる“フィットネス”を対象に「主体化＝隷属化」する身体を捉えるならば、それは女性だけの問題に限定されることではない。フィットネス産業が仕掛ける「理想的身体」への囚われは、ジェンダー・イデオロギーのみならず、階級格差にもとづく覇権の観念（「健康」イデオロギーなど）等も絡みついている。したがって、第二のパターンにおける先行研究では、「女」の位置を先験的に確定しており、フィットネスを含むスポーツをジェンダー・イデオロギーに対する女性の“抵抗”の手段として措定することにより、抵抗によってのみスポーツの主体となる「女」を特権化している。

さらに、自己規律化の問題は、フィットネスよりも競技スポーツにおいて重大であるにもかかわらず、これまで競技スポーツにおける自己規律化の問題を正面から取り上げた先行研究はほとんど存在しない。競技スポーツに参加する者は、「より速く、より高く、より強く」機能する身体を求めて、極限まで体脂肪を減らし、異常なまでの筋肉の発達など、およそ「健康」のイメージとはほど遠い、身体加工とも呼べるような自己規律化にむかう。「より～」の理念のもとで頂点を制した者が、最も名誉ある称号を与えられるというスポーツ観を多くの人々がグローバルに共有しているが、その過程には身体加工のみならず、参加条件や動作の制限など、自己規律化を参加者に促すルールが満ちている。特に後述するように、「女性種目」に参加するアスリートは、「男の対概念として名づけられた女」であることの証明がルールを遵守する上で必要になる。しかしながら、競技参加はルールに従うことを前提とするため、ルールやルールによって派生する権力が見逃されながらスポーツ規範が生産される。

以下では、先行研究のように、「女」を「主体」として立ち上げ、性的表象を「女性差別」と一面的に位置づけられるのではなく、また、ジェンダー・イデオロギーへの抵抗と服従に図式化されるのでもない女性アスリートの「性の商品化」について考察してみたい。それは、さまざまなルールを中心に構築されるスポーツ規範の権力作用との関連のもと、

「女性身体」の理想化、官能化が作用した事態なのである。

4. スポーツ「規範」と「性の商品化」

近代スポーツは、効率的に生産性を生み出すことを「善」とする近代思想を反映しながら「より速く、より高く、より強く」機能する身体の競い合いを目的に幕を開けた。近代スポーツの幕開けは、この「より～」の理念のもと、わずか数秒単位、数センチ単位の記録の「差」に大きな意味づけをするとともに、競技する者を「性器的身体」によって「女」と「男」に二極化することを前提としていた。

「女」のカテゴリーに属する者は、先験的に次代再生産のための「生殖器」を有する身体とされ、その身体観からつねに眺められることになる。将来の出産と育児のために「医学的見地」は、「女」のスポーツや身体活動が、その性には適さないものとして禁止してきた。しかしその一方で、健全な「男子」を再生産する「女」の身体的質が問われる戦時には、「女」のスポーツや身体活動はむしろ奨励されるという矛盾に満ちた歴史も存在する。さらには、「女」のスポーツへの参画に関する賛否が美醜の観点からも問われ、スポーツ実践により「女性としての」容姿を損なうとみなされた時代もあった⁽¹⁰⁾。しかし今日の「健康観」と「ダイエット志向」は、細く引き締まった身体や容姿を求めて、「女」をスポーツ実践へと導く言説を生産している。「女」に対してスポーツ実践の禁止と奨励を繰り返してきた歴史は、すなわち、スポーツ規範から「女」が差異化されてきた現実を物語っているのである。では「女」のスポーツ参画や参加種目の解禁が拡大している今日的状況の中で、「女」はスポーツ規範における差異としての存在ではなくなったと言い切れるだろうか。

産業革命以降の、効率の良い機械化を想起させる「より速く、より高く、より強く」機能する身体は、「男」に属する身体においてより明確に機能する局面を特に筋力に集約し、象徴化してきた。この近代スポーツの理念は、「平和の祭典」「参加することに意義がある」などの対極的言説によって機械化される身体の人間性を隠蔽し、さらに、「女」を対照的要素として参画させることにより、「男」の身体的優位を保持・再生産していると考えられる。すなわち、「西洋」を定義するために「東洋」の概念が形式的に必要とされたように⁽¹¹⁾、近代スポーツの理念を引き継ぐ今日のスポーツは、「男」を定義するために「女」の形式的参画を必要とした。「より～」の理念と並行して審美性や芸術性を競い合う領域が「女」だけに用意されているのは、「女」の“特権的”領域として開かれた参画を提供することで、スポーツ文脈の中で可視化しうる「女性性」の獲得に成功し、「女」を実体性のない「構成的外部」に位置づけることができるからである。

「構成的外部」とは、ジュディス・バトラーの言葉であるが、それは「正当な主体」や「本質」とされるものが反復的に規範化される際に、常にそこから排除される「外部」の領域のことである。その「外部」は、理解不可能で、非合法の、おぞましきもの（可視化はされてはいても、実態性を持たないもの）であり、常に主体概念として立ち上がるものにつきまとう。しかしバトラーは、「構成的外部」を真実とみなそうとしているわけでも、それを産み出す権力を取り去ることを模索しようとするわけでもない。そうではなく、バトラーは常に「正常な主体」が生成される際につきまとう「構成的外部」の存在が、反復され、増殖されることにより、理解可能な領域の限界を明らかにし、攪乱し、それが持つ規制目的をあばくところに可能性を見いだすのである。したがって、スポーツというシス

テムが保持する規範が反復される際には、必ず「構成的外部」を伴い、その規範に攪乱を及ぼすような可能性が見いだされると考えられる。ではいったい、スポーツ規範の中で、バトラーの「構成的外部」という考え方と、女性アスリートによる「性の商品化」現象はどのように関連するのだろうか。

スポーツ規範の中でおこなわれた女性アスリートによる「性の商品化」という現象は、とかく女性スポーツが抱える資金不足の問題から生じたとする見解が多く、事実、「性の商品化」や女性アスリートの性的表象を資本獲得と関連づけるスポーツ・フェミニストも多い。例えばジェニファー・ハーグリーブスは、女性アスリートが自らの性を「商品」として搾取することはメディアや世間の注目をあつめ、資本獲得の早道になるとし[Hargreaves 1994:162-163]、ゲトゥルード・フィスターは、女性アスリートが自らを商品化する背景には、パフォーマンス向上による設備・管理等の莫大な資金が必要であること、そのために海外のスポンサーから補助を得なければならないことを要因として挙げている[Pfister 2002]。フィスターはまた、このような背景からトップレベルのスポーツがトップレベルのビジネスへと至る土壌が成り立ち、そこでは単なるメダリストではなく市場価値の高い「売れる」アスリートが必要とされると指摘する⁽¹²⁾。

冒頭で紹介したオーストラリアやオランダの女性アスリートが、ヌードに至ったのも資金不足のためと報道されている。また、種目差や国の状況にもよるが、女性アスリート、女性スポーツの予算配分は男性アスリートや男性スポーツよりも下回る傾向にあると報告されることが多い。しかしながら、スポーツ界、ひいては各スポーツ団体の「資金不足」という問題は、スポンサー企業の経営状況や社会的な経済状況に大きく左右されるため、プロ・スポーツのみならずアマチュア・スポーツにおいても、また女性スポーツだけでなく男性スポーツにも多大な影響を及ぼす。また、競技引退後の経済力に対する不安もアスリートには深刻な問題となる。したがって、女性アスリートの「性の商品化」という現象の背景について、たとえそうではあったとしても「資金不足」の理由のみをことさら強調することにより、「女」に向けられる「まなざし」を固定化・特殊化してしまう。

つまり、女性アスリートの「性の商品化」を説明する際に、「資金不足」という理解可能で「正当」な理由が前景化される背景には、「女」の隷属的地位を前提とし、その後に、首尾一貫した「女」の主体的地位の回復をめざすことが想定されていると考えられる。そして、もしそうであるならば、「資金不足」という理由説明は、「女」の「男」(＝スポーツ規範)との差異を「物質的身体」に依拠する言説(例えば「女性が男性と同じことをやっても面白みに欠け人気でない(＝儲からない)」といった言説)を産み出すだけでなく、「女」という普遍的で統一的なカテゴリーを想定し、構築してしまうことになる。

繰り返しになるが、バトラーの「構成的外部」という概念を採用するのは、政治的権力を免れた「女」の固有の文化をめざすためではない。規範や主体が形成される際にその意味作用につきまとう「構成的外部」としての「女」のセックスが、常に身体に限定され、しるしづけられることで、そこに隠蔽され、自然化される権力の存在をあばく可能性が出てくるのである。したがって、「女」のヌードが強調される女性アスリートの「性の商品化」現象は、「男」の身体を自然化し、スポーツ規範の権力を隠蔽する。だがその一方で、スポーツ規範の権力にまみれながら曖昧な「女」の身体の表象が反復されることで、「男性性」の普遍化やスポーツ規範の権力の限界がほころびを見せる可能性も秘めていると言える。

5. 「構成的外部」である「女」の条件

「近代化」を迎えたスポーツへの参画以来、「物質的身体」によって「女」と位置づけられたアスリートは、自分が「女であること」を競技の公平性のもとで常に証明し、「男」とは住み分けられた「女性種目」の中で競技することが義務づけられてきた。最近になって「男女混合種目」も登場してきたが、その数はいまだ少ない。

近代スポーツの理念である「より速く、より高く、より強く」を「男」のもとで成立させるには、「女」や「女性性」という対立的観念が必要であったということはすでに言及した。特に現代に入ってから、「女性種目」への参加資格が、「性器的身体」にもとづく性別チェック（gender verification）——「女」か「男」かを検査する——を手がかりとして与えられるようになり、「女」の中に「男」が混じることの不利益だけを想定されながら、その性別チェック機構の存在は正当化されてきた。しかし、「競技の公平性」という観念が前景化されながら、性器の形体によるチェックから遺伝子細胞のチェックに至るまで、「男の対概念として名づけられる女」であることを「女性種目」に参加する者のみが証明しなければならず、しかも「女」の身体はその判断基準を「科学」によって精密にすればするほど、曖昧になるという矛盾をはらんでいた。

しかし一方で、スポーツ・フェミニストたちは、女性アスリートの存在に、スポーツ界が頑なに固辞し続けている「女」のカテゴリーを揺さぶる可能性を見だしてもきた。女性アスリートの鍛え上げられたアスレティック・ボディ——筋肉質、発達した骨格をもつ身体——やその機能は、人々に彼女たちが「本当に「女」であるのか」という疑念を抱かせる。このことは、ルールとして用意されている「女性種目」に参加し、“遺伝子レベル”においても「女」と証明されたアスリートの表象が、人々の認識の中にあるステレオタイプ化した「女」のイメージを「ずらす」可能性を秘めているということである。したがってスポーツ・フェミニストたちは、メディアの〔ヘテロ〕セクシズムにもとづく「女性性」の表象に異議申し立てをしながらも、女性アスリートが〔ヘテロ〕セクシズムに「抵抗可能な存在」とも考えてきた⁽¹³⁾。

しかしながら、今日の女性アスリートによる「性の商品化」は、〔ヘテロ〕セクシズムにもとづく「女性性」を反復し、彼女たち自らその表象を引受けることで成り立っている。すなわち女性アスリートの「性の商品化」現象は、「女」の虚構性をあばく行為体となりうるアスリートの存在に期待をしてきたスポーツ・フェミニストらを裏切り、「女」の虚構性に自ら埋没しようとするアスリートを浮き彫りにする。とみに欧米のアスリートが「女性性」を強調するのは、アスレティック・ボディの外見やその機能から「男のような女」とレッテルを貼られることにより、レズビアン「男役（ブッチ）」のアイコンと同一視され、即座に性的指向性までを問われる現状があるためと言われている。

「ルール」という名の「法」のもと、「女性種目」と「男性種目」の二分化があらかじめ決められているが、それはジェンダー化された「科学的根拠」にもとづくチェック機構により、「女性種目」に参加できる「女」の証明を、身体を通じて義務づけてきたからである。「男」を定義するために、常に「構成的外部」の存在を必要とするスポーツ規範は、「女」に属する者を「性器」の形状や、次代再生産として機能する「生殖器」から判断する。したがって、次代再生産のためには、「異性愛」の性的指向性でなければならない、「異性愛」であることのしるしが「女」の表象の中に要求される。逆に言えば、アスレティック・ボディという「男性性」の要素を容易に可視化しうるスポーツ界だからこそ、厳密に

「構成的外部」である、男性性を普遍化する差異としての「女」が要求される。したがって、非異性愛であるレズビアンは「男の対概念として名づけられる女」には属さないものとみなされ、実際に、プロテニスプレイヤーのマルティナ・ナブラチロワやWNBAのプレイヤーであったマライア・B・ネルソン、さらにはバレーボールのカナダ代表チームで監督を務めていたベティー・バクスターは、「非異性愛」であることを理由に、スポーツ界から排除された。このようなホモフォビアを目の当たりにすることで、アスリートたちは「男の対概念として名づけられる女」でいることの「正当性」を学習し、自己規律的にその証明をおこなうものと考えられる。

2004年のアテネ五輪開催前に国際オリンピック委員会（IOC）は、「性同一性障害」のアスリートの参加を許可した。が、それは多様性を認め、人権尊重の社会的潮流に沿う形で「セクシュアル・マイノリティ」を包摂する動きのようでありながら、そうした人々が手術を施し「性的」に「女（男）」になることを「ルール」として義務づけるものであった。つまりこの決定は、実質的には競技に参加可能な「性同一性障害」のアスリート人口を狭めながら、第二の性別チェック機構となったのである。このように、スポーツ規範を維持するための「ルール」は、単なる参加種目の限定性を設けたにとどまらず、「構成的外部」の「女」や「性同一性障害」のアスリートにのみ、「性別化された」身体の証明を遵守させている。そして、「女」や「性同一性障害」のアスリートがその証明を自己規律的におこなえばおこなうほど、「男」の身体を自然化し、普遍化するスポーツ規範の権力は隠蔽されていく。

女性アスリートの「性の商品化」にみられる表象は、アスレティック・ボディでありながら、「女」のヌードという古典的かつ芸術的な身体に重ねられることで、決して「男」を脅かすことのない異性愛の「女性性」をより強く浮かび上がらせる。「構成的外部」である彼女たちの「性の商品化」は、「自己決定」「自己選択」というよりも、むしろ、〔ヘテロ〕セクシズムが性規範となる社会の中で「女性性」を喚起させるヌードを可視化することにより、スポーツ規範がせまる「男の対概念として名づけられる女」の証明を、アスリートが自己規律的にこなった結果であると考えられる。そして、身体による「女」の証明を自己規律的にこなせばおこなうほど、「女性たちには最初から選択の余地はあまり与えられていないのだという事実が社会的に隠蔽され」[浅野 1992 : 95]ていくことになる。したがって、国境を越えたアスリートたちのヌードによる「性の商品化」現象は、スポーツ規範が「構成的外部」の身体を有徴化する制度を常に内包してきた結果であり、その産物と言える。ではいったい、「性の商品化」による女性アスリートのヌード表象が、「ジェンダー・トラブル」の契機となる可能性はあるのだろうか。

6. スポーツ規範の「ほころび」

将来的に、「女性種目」が拡大し、そこに参加するアスリートの競技力も向上し続けることで、「男性性」の普遍化を維持するために、スポーツ規範はますます強化されていくであろう。そして、「構成的外部」である身体を有徴化しないことには成り立ち得ないスポーツ規範は、「構成的外部」である身体の可視化をこれまで以上にさかんに、幅広くおこなっていくものと考えられる。したがって、女性コーチ・役員数の増加を訴えるアフーマティヴ・アクションや、女性アスリートに関するメディア表象の増加を求めるこれまでの「男女平等」論は、皮肉にも、スポーツ規範の「構成的外部」の可視化のために

絡めとられてしまう可能性がある。また、女性スポーツ振興の中で、出産を経て競技に復帰する「ママさん」アスリートを新たなロール・モデルとして歓迎するあり方も、「女」の身体の有徴化に一役買ってしまう。

他方、「構成的外部」として可視化される女性アスリートのヌード表象は、今でこそセンセーショナルに問題化されてはいるものの、やがてはグローバル・スタンダードと化し、多くの女性アスリートがヌードをさらす状況になっていくかもしれない。そして、女性アスリートのヌード表象が量産されればされるほど、「構成的外部」としてふさわしい「女性性」の記号化がさらに厳密におこなわれていくものと考えられる。しかし、女性アスリートのヌード表象は、リング・ニードが指摘するような、規範や秩序を脅かさずに「女性性が始まり終わる場所を強化（する）」[Nead 1992=1997:25] だけではない。むしろニードの指摘は、ボディ・ビルディング元世界チャンピオンであるリサ・ライオンのヌードが、「芸術」として枠づけ（境界画定）られなければ、容易に規範や秩序を脅かし得るものになることを暗に示している。

「より速く、より高く、より強く」機能する身体は、資本と強固に結びつきながら、今後ますます価値を高めていくだろう。それに伴い、スポーツ規範も隠微に強化・維持されていくものと考えられる。そしてアスリートは、これまで以上に薬物使用という禁止事項を犯してまで「勝者」になることに固執していくかもしれない。実際、競技力が高まれば高まるほど、ドーピング問題は深刻さを増しており、アンチ・ドーピング組織の取り組み対策とアスリートのドーピング使用は“いたちごっこ”を繰り返している。さらに、スポーツ規範が強化・維持されるにつれて増す禁止薬物をめぐる問題は、薬物を使用するアスリートの身体を副作用によって蝕むことになる。特に筋肉増強作用のある蛋白同化剤（ステロイド剤）は、筋肉量を増加させると同時に、「男」の身体を「女性化」（乳房の肥大化、睾丸萎縮など）させ、「女」の身体を「男性化」（多毛、声が低くなるなど）させるという、スポーツ規範の強化・維持にとっては皮肉な結果をもたらすことになる。

19世紀のドイツでは、近代生活や市民的価値観に対する異議申し立てとして、「純粋なもの」、真の生命力の回復が求められ、裸体主義が「生活改良」運動の一部として提唱されていた。その中で、体操家が人々の国民的ステレオタイプとみなされ、彼らの「男らしさと道徳意識は無垢なる自然とギリシャの美を反映したもの」[Mosse 1988=1996:66] と考えられていたという⁽¹⁴⁾。それ以降、古代オリンピックの勝者を象った裸体のギリシャ彫刻（例えばポリュクレイトスの「槍をかつぐ人」など）は、近代における人間（男）の理想的身体像として象徴化されるようになった。さらにそれは、競技する身体と「男」の身体を強く結びつけるメタファーともなった。しかしながら、スポーツ規範の強化・維持に伴うアスリートたちの薬物乱用という事態が、ギリシャ彫刻を媒介に構築されてきた身体像（理想的身体－競技する身体－「男」の身体）を崩壊させる状況を生み出している。過剰な筋肉に覆われたサイボーグのような身体は、「自然」のイメージとはほど遠く、時として非異性愛の男性が欲望する身体のアイコンにもなった。あるいは薬物の副作用による「女性化」した身体が、もはや競技する身体と「男」の身体を結びつけることを不可能にしている。その一方で、「構成的外部」である女性アスリートのヌード表象が反復され、可視化されることにより、ギリシャ彫刻に変わる「男性化」した「女」の身体が登場する可能性が生じている。スポーツ規範は予想だになかった状況を迎え、その「ほころび」はすでに取り返しのつかないところまで来ている。

7. おわりに

性別チェック機構による「女」の身体の見定めは、ジェンダー化された身体観をすでに内包している「科学的根拠」から発進し、生殖による「異性愛」を前提としながら、身体記号といった言説手段により「男の対概念として名づけられる女」を首尾一貫したものとして維持する。そして、「男の対概念として名づけられる女」を首尾一貫したものにする「ルール」という規制や、それに反する者へのあからさまな排除という権力は、「欲望や身ぶりや行為の「原因」を行為者の「自己」の内部」に求める時に見えなくなる[Butler 1990=1999:240]。女性アスリートの「性の商品化」現象は、まさに「資金不足」や「自己選択」などの言説が前景化されながら、その「原因」が彼女たちに求められ、スポーツ規範が常に内包している規制や排除の権力は隠蔽されてきた。スポーツの文脈ではルールによる自己規律化があまりにも浸透しているために、特にアスリートには、スポーツ規範が生産している権力が「自然」なものとして見逃される。

スポーツ規範は、「ルール」のもとで「男の対概念として名づけられる女」に固執する。なぜなら、あらかじめ「構成的外部」として位置づけられた「女性種目」に「男」を超越する、つまり、「男」の主体性や普遍性を定義し損ねる「女」の存在は排除されるからである。この排除により、スポーツ規範は維持され続けるのである。スポーツ規範の中で「女」はあくまで実質性のない形で可視化されればよいのである。したがって「女」を「構成的外部」としてとどめておくために、性別チェック機構がルールとして設けられ、チェック義務を正当化するような言説——「競技の公平性」——が流布し、時にはその従属的位置づけにふさわしくない「女」が制裁を加えられながら、生殖を中心とする「男の対概念として名づけられる女」に関する言説や表象がパフォーマティヴに反復される。裏返せば、「男の対概念として名づけられる女」を措定しなければ、その首尾一貫性を保持しようとする捏造が見破られる局面をスポーツ文脈が多くはらんでいるということである。芸術性や審美性を競い合う種目から、筋力の極限を競い合う種目まで、「女」が参加できる種目は「男」よりも多様性に富んでいる。「女」に「男」と同じ土俵と異なる土俵を両者と与えたことにより、容易に可視化しうる「女」のアスレティック・ボディの外見にすでに「ばらつき」を生じさせている。首尾一貫した「女」の証明にこだわるスポーツ規範とのせめぎ合いの中で、アスレティック・ボディの「ばらつき」はすでに「女」の首尾一貫性が虚構でしかないことを物語っている。

註

- (1) 「構成的外部」に関しては、[Butler 1993]を参照。また、[新田 2000:225-239]を参照。
- (2) リンダ・ニードは、ピエール・ブルデューの権力が再生産される「文化的ディスタンス」にもとづき女性のヌードについて検討しているが、女性のヌードのイメージはその内容のみで決定されているわけではないと言及している。
- (3) 各国の女性アスリートの「性の商品化」に関する事例については、<http://japanese.joins.com/html/2004/1122/20041122194105600.html>などを参照。また、梅津迪子 [2004:110-117]やJWS (Japanese Association for women in Sport) のコラム www.jws.or.jp/jpn/library/youknow/lib_youknow_03.htmlなどでも参照。
- (4) 2001年に、国際的に有名で性的アピールの対象となる「アンナ・クルニコワ」がコンピューターウィルスの名前として使用された。
- (5) 詳しくはGetrud Pfisterの2002年講演内容やWomen's Sports Foundationのメディアに関する記事を

参照。テニス界ではクルニコワの登場以来、女性プレイヤーのウェアのデザインにおいてファッション性と露出度が増す傾向にある。

- (6) 「まなざし」に関する研究の第一のパターンとして代表的なものは、Cohen et al. [1993]や Hargreaves [1994]などをあげることができる。ここでは主に、「まなざし」を向ける側（男性）と向けられる側（女性）という権力図式が想定されている。このような見解にもとづく研究は、1990年代前半を中心に多くの研究者によっておこなわれた。日本においては、飯田貴子などがこの立場に依拠しているものと思われる。
- (7) Foucault [1975=1977]を参照。
- (8) 第二のパターンの研究として代表的なものは Markula [1995, 2003]や Colins [2002]などがある。主にフィットネス産業のエアロビクスを手がかりとしながら、フーコーの「主体化＝隷属化」について言及している。
- (9) 「ヘテロ」セクシズムは異性愛主義（ヘテロセクシズム）と男女の性差別（セクシズム）が不可分な抑圧構造であるとする竹村和子の言葉。
- (10) 詳しくは Cahn [1994]の第一章を参照。
- (11) Said [1978=2003]を参照。
- (12) この点についてフィスターは、どのようなアスリートが市場価値の高い「売れる」アスリートなのかに関する詳細は論じていない。
- (13) Birrell and Theberge [1994:361-376]は、女性アスリートがジェンダー・イデオロギーに対し「抵抗可能な存在」として捉えている。
- (14) ボードリヤールは美しさとエロティシズムの概念について言及する際に、男性的モデルと女性的モデルを区分し、前者をアスレティズム（男性美追求）、後者をプリュネーイズム（女性美追求）と呼んでいる。また近代オリンピックは、古代オリンピックの復活をめざしたものであったが、1896年の第一回大会は男子の参加しか許されなかった。

引用・参考文献

- 浅野千恵 1992「潜在的商品としての身体と摂食障害」江原由美子（編）『性の商品化：フェミニズムの主張』勁草書房 pp. 87-95.
- Baudrillard, Jean. 1970 *LA SOCIÉTÉ DE CONSOMMATION: Ses Mythes, Ses Structures*. Gallimard. 今村仁司・塚原史（訳）『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店 2000.
- Birrell, Susan and Nancy Theberge 1994 "Feminist Resistance and Transformation in Sport," in Costa, D. Margaret & Sharon R. Guthrie (eds.), *Women and Sport: Interdisciplinary Perspectives*, Champaign, IL: Human Kinetics, pp. 361-376.
- Bolin, Ann and Jane Granskog (eds.) 2003 *Athletic Intruders: Ethnographic Research on Women, Culture, and Exercise*. Albany: State University of New York.
- Buttler, Judith 1990 *Gender Trouble: Feminism and Subversion of Identity*. New York & London: Routledge. 竹村和子（訳）『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社 1999.
- 1993 *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*. New York & London: Routledge.
- Cahn, Susan K. 1994 *Coming on Strong: Gender and Sexuality in Twentieth-Century Women's Sport*. Massachusetts. Harvard UP.
- Cohen, Greta. L. ed. 1993 *Women in Sport: Issues and Controversies*. California: Sage Publication.
- Collins, Leslea Haravon. 2002 "Working out the Contradictions: Feminism and Aerobics." *Journal of Sport & Social Issues*, 26(1): 85-109.
- Davis, Laurel R. 1997 *The Swimsuit Issue and Sport: Hegemonic Masculinity in Sports Illustrated*. Albany: State University of New York Press.
- Foucault, Michel 1975 *Surveiller et Punir: Naissance de la prison*. Gallimard. 田村俣（訳）『監獄の誕生：監視と処罰』新潮社 1977.

- Griffin, Pat. 1998 *Strong Women, Deep Closets: Lesbians and Homophobia in Sport*. Champaign, IL: Human Kinetics.
- Hargreaves, Jennifer. 1994 *Sporting Females: Critical Issues in the History and Sociology of Women's Sports*. London and New York: Routledge
- 2000 *Heroines of Sport: The Politics of Difference and Identity*. London and New York: Routledge.
- Irigaray, Luce 1984 *Éthique de la différence sexuelle*. Paris: Éditions de Minuit. 浜名優美（訳）『性的差異のエチカ』産業図書 1986.
- Jacobus, Mary, Evelyn Fox Keller, and Sally Shuttleworth (eds.) 1990 *Body Politics*. New York: Routledge. 田間泰子・美馬達哉・山本祥子（監訳）『ボディー・ポリティクス：女と科学言説』世界思想社 2003.
- Markula, Pirkko. 1995 "Firm but Shapely, Fit but Sexy, Strong but Thin: The Postmodern Aerobicizing Female Bodies." *Sociology of Sport Journal* 12: 424-53.
- 2003 "Post Modern Aerobics: Contradiction and Resistance." in Bolin, Ann and Jane Granskog (eds.), *Athletic Intruders: Ethnographic Research on Women, Culture, and Exercise*. New York: SUNY.
- Nead, Lynda. 1992 *The Female Nude: Art, Obscenity and Sexuality*. London: Routledge. 藤井麻利・藤井雅美（訳）『ヌードの反美学：美術・猥褻・セクシュアリティ』青弓社 1997.
- Nelson, Mariah Burton 1994 *The Stronger Women Get, the More Men Love Football: Sexism and the American Culture of Sports*. New York: Avon Books.
- 新田啓子 2000 「意味づけ直すこと／ゆだねること」『現代思想』28(14): 225-239.
- Pfister, Getrude 2002 「女性アスリート・マスメディア・オリンピック大会」JWS 講演会報告
http://www.jws.or.jp/2002/0720_2.html
- Said, Edward W. 1978 *Orientalism*, New York: Georges Borchardt Inc. 板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子（訳）『オリエンタリズム上／下』平凡社ライブラリー 2003.
- 瀬地山角 2001 「性の商品化とリベラリズム：内容批判から手続きへ」江原由美子（編）『フェミニズムとリベラリズム フェミニズムの主張 5』勁草書房 pp. 107-142.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. 1988 *Can the Subaltern Speak?: In Marxism and the Interpretation of Culture*. 上村忠男（訳）『サバルタンは語ることができるか』みすず書房 1998.
- 梅津迪子 2004 「女性スポーツの商品化」飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店 pp. 110-117.

（共愛学園前橋国際大学男女共同参画学習センター研究員）